

特集 安曇野水物語

めぐるみ

問環境課 TEL 71・2492



●黒沢川
かつて三郷地域の水源となった沢。上流には
高さ約15mの壮大な滝「黒沢の滝」がある。

地下水を守る 安曇野ルール

市では地下水を安曇野に暮らす皆さんの共有財産とし、地域全体で守るルールを定めて水の収支バランスの改善を目指しています。

●地下水採取量の報告と大口利用者の事前審査

地下水をくみ上げている皆さんには採取量の報告、新しく地下水をくみ上げる皆さんには採取量などに応じて事前審査を行い、くみ上げ量を把握しています。

●地下水の流入・流出量のチェック体制を強化

水位と水質のモニタリングや周辺の地下水に影響をおよぼさない採取量を決め、毎年評価を行っています。

地下水の長い旅

蛇

口をひねると出てくる水道水やワサビ田を潤す湧き水、豊かな水資源を生かした産業など、私たちの暮らしを支えている水。1日に何度も触れるその水は、長い年月をかけて育まれた自然からの贈り物です。安曇野の水道水は地下水100%。このように、日本で地下水のみの水道水を飲んでいる人は全体の約7%といわれており、この恵まれた環境は決して当たり前ではありません。

安曇野は山から流れてきた土砂が扇のようにたまってできる扇状地が重なり合った複合扇状地です。北アルプスに降った雨や雪は小さな沢となって山を下り、扇状地へ流れ込みます。扇状地は砂や石で作られているため、水が浸み込みやすい性質があります。その地層のさらに下に広がるのは北アルプスなどを形づくる水を通しにくい地層。岩石を多く含むこの地層が水をためる器の役割を果たし、諏訪湖の約303倍・約191億ℓにもなる豊富な地下水が松本盆地の中に蓄えられています。地下をゆっくりと流れる水は標高の高い場所から平均で10～15年かけて、犀川・高瀬川・穂高川の三川合流部に集まって湧き水として地上に姿を現します。

山の恵みを生かした暮らし

市水環境審議会長を務める大阪公立大学教授の遠藤さんに、安曇野の水の特徴や地下水を守るために必要なことを聞きました。

山

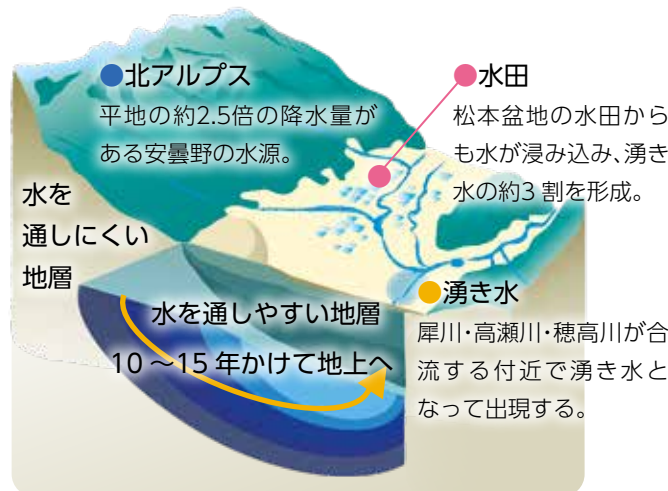
に降った雨や雪が長い年月をかけて湧き水として再び地上に姿を現す。安曇野は水が循環して、豊富な地下水を育んでいる地域です。その地下水は皆さんが普段飲んでいる水道水の水源になっているほか、ワサビや信州サーモンなどの特産品の生産、湧き水がある景色を生かした観光など、地域を支える資源として幅広く利用されています。こうした水と共に暮らし文化が根付いていることも、この土地ならではの特徴です。

地下水を守る収支バランス

恵まれた水環境がある安曇野ですが、地下水は40年程前に比べ減少していることが分かっています。原因は水田の減少や都市構造の変化、地下水の利用増加、近年では気候の変動なども関係していると考えられます。この地下水を守る鍵となるのが「水の収支バランス」です。市では地下に水が浸み込む涵養量と地下から水をくみ上げる揚水量を把握し、必要な取り組みを行うことで水の収支バランスの改善を目

先人の思いと技術の結晶

水はけの良い扇状地の真ん中では、農作物の不作や水不足に苦労してきた歴史があります。そのため、先人たちは多くの堰を各地に作りしました。こうして安曇野は全国有数の米どころとなりました。このうち約200年前に造られた拾ヶ堰は歴史的な価値と功績が認められ、世界かんがい施設遺跡に登録されています。



●プロフィール

環境政策学を専門とし、地下水管理などの研究を行う。市水環境審議会長を務め、市の水環境施策に携わっている。

指しています。例えば、ムギやコメを収穫した農地に水を張る取り組みは水の収入となる涵養量を増やし、地下水をくみ上げる皆さんに採取量を報告してもらう市独自のルールは水の支出となる揚水量の管理につながります。市ではこうした取り組みの設計図を「水環境基本計画」としてまとめています。設計図の策定には行政・事業者・一般市民が参加しており、しかも進捗の評価もみんなで一緒に行うという徹底ぶりです。こうした自治体は全国的に見ても非常にまれです。皆さんが水の価値を知ること、収支バランスの改善には欠かせません。さまざまな関係者が協力し、豊かな水環境を守る取り組みを続けることが地下水を未来へつなぐ一歩となります。



大阪公立大学現代システム科学域
環境社会システム学類教授
遠藤 崇浩 さん